

平成22年 4月26日現在

研究種目： 基盤研究（B）  
 研究期間： 2006～2008  
 課題番号： 18320143  
 研究課題名（和文） 文化伝達の逆流現象と「エイジング」の変容に関する人類学的研究  
 研究課題名（英文） Anthropology of Cultural Transmission from Younger to Older Generations, and Nature of Ageing  
 研究代表者  
 野村 雅一（NOMURA MASAICHI）  
 京都外国語大学・国際言語平和研究所・客員研究員  
 研究者番号： 60142014

## 研究成果の概要：

老後と呼び慣わされる人生の段階に至っても、青年・壮年期に形成された個々人のアイデンティティの連続性は保持される。それが若い世代のライフスタイルを受容する文化伝達の逆流現象が生じるゆえんである。認知症の患者には、錯誤により、女性は若い「娘」時代に、男性は職業的経歴の頂点だった壮年期の現実に戻って生きることがよくある。人生の行程は直線ではなく、ループ状であることを病者が典型的に示唆している。

## 交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	8,300,000	2,490,000	10,790,000
2007年度	5,100,000	1,530,000	6,630,000
2008年度	2,500,000	750,000	3,250,000
年度			
年度			
総計	15,900,000	4,770,000	20,670,000

研究分野： 人文学

科研費の分科・細目： 文化人類学・民俗学

キーワード： エイジング、世代間関係、通過儀礼、文化伝達、ジェンダー、国際研究者交流、台湾、ドイツ

## 1. 研究開始当初の背景

「エイジング」というと一般に老化や老いのことと考えられがちだが、正確には、誕生にはじまり、成長し、やがて死をむかえるまでの人間の生の時間的プロセスである。そのエイジングには肉体的側面のほかに、精神的側面や社会・文化的側面があり、加齢によって肉体的変化とともに、一般には精神的成熟や社会的地位の変更、生活スタイルや自己意識の変容が生じると考えられている。しかし

ながら、エイジングのこれらの諸側面の変化の歩調は必ずしも同期せず、また個人差も大きい。エイジングの諸側面のこのいわば跛行性は今日、急激に顕著になっている。具体的にはたとえば「大人になれない」とか「老いられない」といった悩みとなつてあらわれる。それは日本のみならず先進工業社会にかなり共通の現象で、実質的な成人年齢がどんどん上つたりしているように、肉体年齢と精神的・社会的年齢の釣り合いをとることが困難

になっており、自分の暦年齢に違和感を抱く人が増加している。

エイジングは一方で世代間関係と密接なかわりをもつ。どの社会でも、文化の基本的部分は、親や祖父母の世代から子や孫の世代に伝えられてきた。ところが近年、このような文化伝達にいわば逆流現象が目立つようになった。一言でいえば、子が親の世代を模倣するかわりに、親の世代が子の世代を真似るという現象である。日本人の間でそのもっとも著しい例はヘアカラーだっただろう。以上が研究開始当初の社会的背景であり、本研究はそこに注目してきた文化人類学者を中心にした研究者の共同研究として実施された。

## 2. 研究の目的

1. の「研究の背景」で述べたような文化伝達の逆流現象はもちろんファッションにかぎられる訳ではない。携帯電話やメールのような通信手段やその言語からライフスタイル万般、さらには価値観まで、むしろ親の世代が子の世代からとり入れ共有しようとしている。日本では今やめずらしくない「とち母娘」はその典型例にすぎない。

その一方で、性経験の低年齢化が報告され、子どもの化粧や飲酒がひろまる等の様子からは、大人の特権的行動に子どももあずかろうとする徴候をみるべきかもしれない。フランスの歴史家、フィリップ・アリエスの有名な研究『子どもの誕生』によると、子どもという社会的カテゴリーはヨーロッパ史では17世紀ごろ生まれたとされる。誕生したのなら死もあるはずだろう。われわれは今、エイジングの変容の結果として、子ども/大人という近代的対比概念の再検討を求められているのではないか。

また、近代の学校制度がエイジングにおよぼしてきた影響もあらためて見直してみる必要がある。

本研究の具体的課題は「研究課題名」にあるとおり、ふたつに分けられる。

### (1) 文化伝達の逆流現象に関して。

メディア環境におけるこの現象については、本研究の連携研究者の藤本憲一がはやくから着目している（『ポケベル少女革命』エトレ刊、参照）。携帯電話等の普及によって対人関係の物理的距離と心理的距離が一致しなくなった。若者の間にはじまったこの親密性の遠近法の変化は大人にもひろがり、家族関係や友人関係を変えてきた。それはさらに、人間の内面と外面の区別の消失というパ

ーソナリティーの変容ともかかわるが、その実態を明らかにする。

### (2) エイジングの変容に関して。

エイジングに古くからまわりつくジェンダーの問題は今日どうなっているのか。とくに「適齢期」や年齢意識の変化から考察する。さらに、死という別れの儀式も含めて人生のいわゆる通過儀礼やさまざまな記念日がどのような意味をもち、とりおこなわれているのかを比較民族学的に検証する。これらの研究を通じて、人間にとってエイジングとは何か、それは今どう変わろうとしているのか、その全行程の見取り図を作ることが本研究の目的である。

## 3. 研究の方法

本研究は、国内外の現地調査と、研究連絡と議論のために公開でおこなう研究会の二部で構成される。日本各地および海外でおこなう調査の結果を集約し、それを研究代表者と連携研究者等が共同討論を通じて共有。さらにそのような研究の過程を一般社会にも還元するためである。

まず、国内外での調査について。

- a 内的な年齢意識と外的な自己表現とコミュニケーションが本研究の調査の眼目になる。外面的な表現は、ファッションや物言いが指標になるので、東京、大阪等とくにシニア層の服装の路上観察をおこない、ファッションを手掛りに年齢意識について聞き取りを実施する。

研究代表者がかねてから訪問調査している認知症専門病院で観察調査をおこなう。認知症は疾病であるが、通常の老化といわば地続きであり、人間にとってのエイジング、経験や記憶について大きな示唆を得ることができる。

近代の学校制度がエイジングにおよぼした影響はきわめて大きい。「少年/少女」という社会的カテゴリーを作ったといえる。地方の農業高校を対象に調査をおこなう。

- b 日本社会の直面する問題が本研究の出発点だが、海外調査をあわせ実施し、われわれの世界的位置づけをおこなう。

イギリスや北欧諸国では、非常に古くから子は10代から親の家を出て独立するというしきたりがあり、その反面として、年老いた親のケアは子の責任ではなく、社会の責任と考えられてきた。ヨーロッパでも南欧のカトリックや正教圏では、老親の介護などは家族でするものとされる。福祉のユニットは家族なのである。東南アジアのベトナムなどでは年齢はいまだに尊ばれ、ライフスタイルは変

化しても伝統的な家族的生活規範や年齢の役割モデルは維持されている。

ドイツおよび台湾の研究協力者と連携しながら、以上のような視点から海外調査をおこなう。

本研究の経過を、公開研究会で発表し、一般からも意見を求める。また、認知症の社会的文化的側面からの研究については、公開国際シンポジウムを開催する。

#### 4. 研究成果

##### (1) 公開国際シンポジウム「認知症と文化」

本研究は「3. 研究方法」に記したように、調査研究とその公開研究会をふたつの柱にしておこなわれた。一般市民への公開研究会は、「エイジングの今を考える会」として大阪市内で7回にわたって開催した。詳細はウェブサイト「エイジングの現在」<http://www.prj-ageing.jp/> で逐次公開してきた。また、シニアファッションの路上観察や聞き取りも同サイトで公開している。

それとは別に、増えつづける認知症について、それがどのような社会・文化的な文脈で起こり、扱われてきたのか、そのケアは今後どうあるべきなのかを、医学からは離れて、世界的に拡がりの中で考察する公開国際シンポジウムを開催した(2007年8月25日、大阪国際会議場)。「エイジングの変容と認知症」という研究代表者の野村の問題提起からはじまり、ノルウェー、ニュージーランド、台湾などの医療人類学者の参加を得て、9人の発表があった。認知症に関する研究集会は少なくないが、その歴史や文化的背景、社会・政治的取り組み等から見直そうとするきわめてユニークなシンポジウムとなった。その内容も上記ウェブサイトで公開した。

##### (2) 文化伝達の逆流現象に関する社会調査。

関西在住の20代前半の独身男女84人のインタビュー調査を藤本がおこなった。言語(口癖・流行語等)、食物、テレビ視聴、パソコン使用、ゲーム機・ケータイ使用、服装、音楽、生活時間の家族内(平均4.4人)のルールの制定・伝達についてである。その結果、家でそうしたルールは、母親が決められているというのが55%で、父親を加えると77%にのぼる。さらに祖父母が決めるケースを加えると100%近くが年長者がルール制定していることになる。親族の間になると、祖父がルール制定者であるというケースが27%で最も多い。少人数の家族内では母親優位になるらしい。

これをみると、日本の家族・親族では意外に年長者が文化伝達の制定者であることがわかる。ただし、これは家庭内のメディア等の利用ルール(支配権)についての調査であ

る。

##### (3) 西北ベトナム黒タイ村落の文化変化

世界の経済・情報流通の主要通路から離れて暮らす周辺民族の間では文化伝承はどのようにおこなわれているのか。樫永は、その点をベトナムの黒タイ族の間で、とくに伝統歌謡と衣装に着目して調査した。今も水田がひろがるなかに木造高床家屋が並ぶ黒タイの集落にも、ポップス音楽やベトナム流洋装が入ってきている。しかし、日常生活全般において、年長者優先、男性優位の序列規範が守られている社会で、年長者が年少者のスタイルをならうことは、たとえ好意的に思ったとしても、まずない。裏返していえば、日本の一部などにみられるような文化伝達の逆流現象が生じるには、共同体の崩壊という条件が必要と思われる。

(なお、樫永真佐夫はこれらベトナム黒タイの研究によって、平成21年に本学術振興会賞を受賞した。)

##### (4) 「死」の変容について。

死はきわめて人間的現象である。死を死と認めるには、人だけがもつなんらかの他界への想像力が必要であるからだ。英語では墓地はセムトリーというが、ギリシア語の「眠りの場所」に由来する。西洋キリスト教世界では、死者は眠っている。したがって、火葬は許されない。日本では最近、家族葬や、葬式抜きいわゆる「直葬」がひろがっている。経済的問題よりも、他界への想像力が弱化し、生者だけの世界になっているからではないか。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 26 件)

1. 野村雅一、ストリートの人類学の提唱へのコメント場所性とマナー化の視点から、関根康正編『ストリートの人類学』上巻、国立民族学博物館調査報告、80号、45-49、2009、無
2. 甲斐健人、「エイジング」の変容と学校・子ども、奈良女子大学文学部研究教育年報、第5号、33-35、2009、無
3. 樫永真佐夫、The Transmission of Written Genealogies and Patrilineality among the Tai Dam, 'Written Cultures in Mainland Southeast Asia', Osaka: National Museum of Ethnology、-、97-216、2009、無

4. 櫻永真佐夫、Introduction、'Written Cultures in Mainland Southeast Asia', Osaka: National Museum of Ethnology、-、1-14、2009、無
  5. 櫻永真佐夫、ベトナムにおけるタイ語表記、齋藤晃編『テキストと人文学 - 地の土台を解剖する』人文書院、-、229-243、2009、無
  6. 玉置育子、リングとしてのストリート 化粧で武装し、化粧で紛れる人々、国立民族学博物館調査報告 (Senri Ethnological Reports)、80号、271 - 287、2009、無
  7. 山田香織、ローカリティのあらかわの場としてのストリート 南ドイツにおける樹木儀礼の事例から、根康正編『ストリートの人文学』国立民族学博物館調査報告 (SER) 81号、213 - 229、2009、無
  8. 野村雅一、命の習俗を考える、じんけん (京都外国語大学人権委員会) 16、17-18、2008、無
  9. 川島昭夫、南方植物研究所とまぼろしの文庫、熊楠works、31号、17 - 21、2008、無
  10. 藤本憲一、「家-族」ルール制定にみるイニシアティブと性差 世代間の「異文化/パラダイム」と逆伝達現象<第1報>、情報美学研究、第2号、63 - 72、2008、無
  11. 櫻永真佐夫、鳳凰、月刊みんぱく、2008年12月号、11 - 11、2008、無
  12. 櫻永真佐夫、黒タイの蚊帳、月刊みんぱく、2008年7月号、11 - 11、2008、無
  13. 櫻永真佐夫、書評：新江利彦著『ベトナムの少数民族定住政策史』、文化人類学 (旧民族学研究) 73号1巻、109-112、2008、無
  14. 玉置育子・横川公子、雑誌「主婦の友」の記事「美容相談」から見る美容への関心、武庫川女子大学 生活美学研究所紀要、第18号、56 - 67、2008、無
  15. 玉置育子、化粧に対する意識の地域差 佐賀県と大阪府のグループ比較、佐賀女子短期大学紀要、42、39 - 46、2008、無
  16. 小森宏美、地域アイデンティティの形成 エストニアの場合に見る功罪、地域研究、第8巻、100 - 115、2008、無
  17. 山田香織、フェラインの民族誌 ドイツ・バイエルン州のローカル・アソシエーション、総合研究大学院大学文化科学研究科提出、-、1 - 250、2008、有
  18. 川島昭夫、路上呼び売り (street cries) の世界、日本イギリス児童文学学会会報、2007年秋号、19 - 20、2007、無
  19. 川島昭夫、飢饉と救荒植物 インド、日本、ヨーロッパ、人環フォーラム (京都大学大学院人間・環境学研究科) 20号、8-11、2007、無
  20. 甲斐健人、農における場の共有とからだ 学校体育の意義再考の糸口を求めて、奈良女子大学スポーツ科学研究、10、33 - 45、2007、無
  21. 野村雅一、特集3 ナースに役立つソーシャルスキル、ナースビーズ、9巻1号、52-59、2006、無
  22. 野村雅一、社会生活のはじまり、月刊みんぱく、30巻10号、5-5、2006、無
  23. 藤本憲一、ケータイ文化人類学の可能性、月刊みんぱく、30巻7号、3-3、2006、無
  24. 櫻永真佐夫、書評：清水郁郎著『家屋とひとの民族誌・北タイ山地民アカと住まいの相互構築史』、文化人類学研究、71-1、141-143、2006、無
  25. 櫻永真佐夫、<書承>文化を考える-西北ベトナムの黒タイの村から、ACCUニュース、358号、2-4、2006、無
  26. 櫻永真佐夫、黒タイ村落における姓の継承と個人呼称、塚田誠之編『中国・東南アジア大陸部の国境地域における諸民族文化の動態』、SER63、109-128、2006、無
- 〔学会発表〕(計 21 件)
1. 藤本憲一、若者のイメージ地図に見る、ケータイと家の現在、第8回ケータイ国際フォーラム (ケータイ国際フォーラム推進会議主催) 京都祇園甲部歌舞練場、2009年3月11日
  2. 藤本憲一、都市に住まう術、都市に住まう術 (武庫川女子大学生生活美学研究所主催) 武庫川学院上甲子園キャンパス、2008年11月29日
  3. 櫻永真佐夫、西北ベトナムの黒タイ村落における染め織物生産の現状について、国立民族学博物館ウィークエンドサロン、国立民族学博物館、2008年11月23日
  4. 甲斐健人、「エイジング」の変容と学校の現在 身体的コミュニケーションに注目して、奈良女子大学附属中等教育学校教員研修会、奈良女子大学附属中等教育学校、2008年11月6日
  5. 藤本憲一、睡眠文化研究フォーラム 新しい眠りが目を覚ます、睡眠文化研究フォーラム (睡眠文化研究会主催) 立教大学池袋キャンパス、2008年10月25日
  6. 玉置育子、「婦人画報」にみる口元

- へのこだわり、第13回日本顔学会大会（フォーラム顔学2008）、東京大学、2008年10月12日
7. 玉置育子、『婦人画報』に見る襟白粉と額化粧について、第13回日本顔学会大会（フォーラム顔学2008）、東京大学、2008年10月12日
  8. 甲斐健人、「エイジング」の変容と学校の現在 身体的コミュニケーションに注目して、第59回日本体育学会、早稲田大学、2008年9月12日
  9. 櫻永真佐夫、東南アジア大陸部の書承文化に関する考察、第19回「百越の会」、国立民族学博物館、2008年8月22日
  10. 櫻永真佐夫、西北ベトナムにおける民族の共生、西北ベトナムにおける民族の共生（生涯学習グループアイアイ主催）、大阪市立総合生涯学習センター会議室、2008年8月18日
  11. 藤本憲一、嗜好品文化フォーラム、嗜好品文化フォーラム（嗜好品文化研究会主催）、キャンパスプラザ京都、2008年5月25日
  12. 櫻永真佐夫、東南アジア・南アジアにおける現地事情に関する勉強会 ベトナム、東南アジア・南アジアにおける現地事情に関する勉強会 - ベトナム（関西電力主催）、関西電力本社ビル、2008年5月15日
  13. 玉置育子、人生をデザインする 化粧ボランティア活動を通じて、生活デザイン小研究会、武庫川女子大学、2008年2月16日
  14. 櫻永真佐夫、Transmissions and uses of the Tai Dam chronicles "Quam To Muang", the International Conference "Modernities and Dynamics of Tradition in Vietnam: Anthropological Approaches", Binh Chau Resort, Vietnam, 2007年12月17日
  15. 野村雅一、身体表現のベイスックス口と手の関係、文明と言語研究会第11回、京都大学、2007年12月15日
  16. 甲斐健人、『からだ』と学校文化 ある農業高校卒業生の事例、第10回奈良女子大学社会学研究会、奈良女子大学、2007年10月7日
  17. 玉置育子、雑誌「主婦の友」の記事“美容相談”から見る美容への関心、第12回日本顔学会、日本大学、2007年9月29日
  18. 甲斐健人、からだの声と社会移動 「世界一」を経験した女性の半生から、日本体育学会第58回大会、神戸大学、2007年9月5日
  19. 櫻永真佐夫、Les usages des chronique

- s dans les funerailles aux village  
s tai -noirs, Viet-nam, Psente dans  
la Table Ronde, "Les outils de la  
pensee : Etude comparative des text  
es et de leurs fonctions sociales",  
co-organisee par le Musee Nationa  
l d'Ethnologie et la Maison des Sc  
iences de l' Homme, la Maison des Sc  
iences de l' Homme, Paris, 2007年5月  
29日
20. 野村雅一、変貌する環境とこども、日本保育学会60周年記念シンポジウム、十文字学園女子大学、2007年5月20日
  21. 野村雅一、葬送と美から、いのちの現在へ、「Yoo, Lizzy 葬送と美」 The Form of the BeautifulLife-Funeral 展、伊丹市立工芸センター、2007年4月7日

〔図書〕(計 10 件)

1. 櫻永真佐夫、ベトナム黒タイの祖先祭祀系譜認識と家霊簿をめぐる民族誌、風響社、320、2009
2. 櫻永真佐夫、Written Cultures in Mainland Southeast Asia、Osaka: National Museum of Ethnology、198、2009
3. 小森宏美、エストニアの政治と歴史認識、三元社、261、2009
4. 櫻永真佐夫（塚田誠之編）民族表象のポリティクス 中国南部の人類学・歴史学的研究、風響社、432、2008
5. 櫻永真佐夫（板垣明美編）ヴェトナム変化する医療と儀礼、春風社、246、2008
6. 藤本憲一（高田公理・堀忠雄・重田眞義編）睡眠文化を学ぶ人のために、世界思想社、270、2008
7. 藤本憲一（高田公理・嗜好品文化研究会編）嗜好品文化を学ぶ人のために、世界思想社、253、2008
8. 櫻永真佐夫（カム・チョン共著）ベトナムの黒タイ首領一族の系譜文書、国立民族学博物館、198、2007
9. 櫻永真佐夫、東南アジア年代記の世界黒タイのクアム・トー・ムオン、風響社、66、2007
10. 藤本憲一（松田美佐・岡部大介・伊藤瑞子編）ケータイのある風景 テクノロジーの日常化を考える、北大路書房、265、2006

〔その他〕

ウェブサイト

<http://www.prj-ageing.jp/>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

野村 雅一 (NOMURA MASAICHI)  
京都外国語大学・国際言語平和研究所・客員研究員  
研究者番号：60142014

### (2) 研究分担者

櫻永 真佐夫 (KASHINAGA MASAO)  
国立民族学博物館・民族社会研究部・准教授  
研究者番号：10342643

### (3) 連携研究者

川島 昭夫 (KAWASHIMA AKIO)  
京都大学大学院・人間・環境学研究科・教授  
研究者番号：00128779

藤本 憲一 (FUJIMOTO KENICHI)  
武庫川女子大学・生活環境学部・准教授  
研究者番号：00248121

甲斐 健人 (KAI TAKETO)  
奈良女子大学・文学部・准教授  
研究者番号：50272183

玉置 育子 (TAMAKI YASUKO)  
大阪樟蔭女子大学・学芸学部・講師  
研究者番号：80369850

小森 宏美 (KOMORI HIROMI)  
京都大学・地域研究統合情報センター・助教  
研究者番号：50353454